

競技かるたの楽しみ

体力、集中力、記憶力そして忘却力

最近の競技かるたの大会は、マンガ『ちはやふる』の影響か、大変盛況である。参加者がとても多いのである。運営する側が、なんとか1日で終わるように苦心惨憺するくらいである。

通常、競技かるたの全国大会（全日本かるた協会が主催している大会）は、4段以上のA級、3段・2段が出場できるB級、初段のC級、段位のない人たちのD級の4階級に分かれ、それぞれ優勝を目指して、1日に6回戦くらいを一戦一戦奮闘している。

私が第一線で競技していたのは、今から35年程前の昭和50年前後。その頃は、せいぜい4回戦程度、多くて5試合目には決勝戦というのが普通だった。

1日に6回も試合をすると、膝はぐくぐくするし、体重は2キロくらい落ちる。何

よりも大変なのは、毎試合、札をしっかりと覚え、かつ、しっかりと忘れること。前の試合の記憶が残っていると、お手つきの原因にもなるし、そのうち手が出なくなる。とても次には勝ち上がれなくなる。記憶力、集中力とはもとより、体力と忘れる力まで必要な過酷なスポーツ。これが競技かるたである。

競技かるたの全国大会は、北は岩手県から南は鹿児島県まで、全国いたるところで開催されており、その回数は1年間の日曜日の日数よりも多い。平成24年10月7日（日）に私の地元石川県では第74回の伝統を誇る「全国かるた競技北國大会」を開催したのだが、同日に埼玉県川口市で東京吉野会の大会（A級のみ）が、また、四国香川県高松市で全国かるた高松大会がそれぞれ開かれていたにもかかわらず、我が北國

大会は、過去最大の参加選手を得たのであり、吉野会大会、高松大会も同様であったろうと推測している。

これらの大会は、そのほとんどが個人戦で戦われるが、各都道府県からの1チーム5人（登録は8人）が参加する国民文化祭や高校選手権、職域学生大会など団体で競う大会もある。

58歳の私は、選手としてはもう役立たずで、大会にはもう長い間出ていないが、国民文化祭の監督を承ったり、選手輸送の運転手をしたり、県協会の副理事長兼会計として会の運営に携わったりしている。また、たまに顔を出す練習会で、子供たちやB、Cクラスの人たちと試合をし、アドバイスをするのが現在の楽しみである。腕は衰えていくばかりであるが、口はますます磨きがかかってきたようだ。



小畠 邦雄

野々市市総務部次長兼総務課長

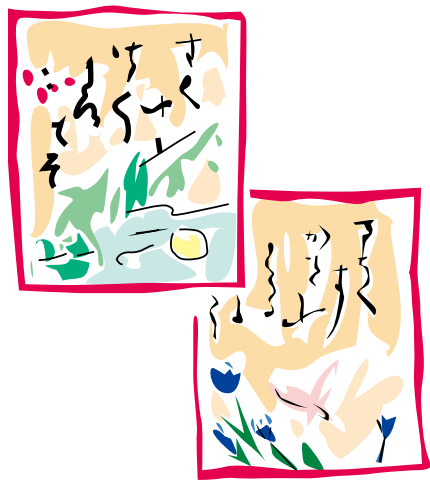
【こばたけ くにお】1954年4月、石川県野々市市（旧石川郡野々市町）生まれ。1977年4月、野々市町役場入庁。2005年1月、新庁舎移転とともに総務部秘書課長。2009年4月、総務部総務企画課長。野々市町は2010年10月、国勢調査で5万人突破（速報値発表は翌年2月）。2011年11月11日、市制施行により野々市町から野々市市へ。2012年4月から現職（機構改革により総務企画課を総務課と企画課に分離）。競技かるた6段、公認審判員の資格あり。

百人一首との出会い

私が百人一首と出会ったのは中学生の頃で、ある年の年末に自宅にある土蔵を整理していて古い百人一首の読み札と取り札のセットを見つけたのが最初であった。

当時（昭和42～43年頃）の北陸石川の冬は、今とは比べものにならないくらい雪が降ったものだった。毎日のように雪が降り、3か月間ほとんど鉛色の雲に覆われていた。そんな毎日の楽しみの一つが、百人一首、かるた取りだった。

かるたの取り札100枚をこたつの上いっぱいに並べ、2人の弟を相手に取った札の枚数を競うのである。私は中学生で弟は小学生、当然ながら、断然強いのである。そのときに自分は百人一首が強いんじゃないかなと思ったその勘違いが、今でも競技かるたにかかわっていることのベースにあるのではないかと思っている。



高校生活を救ってくれた

競技かるたとの出会い

高校に入るとしばらくして、五月病、今で言う不登校になりかけた。1年生の1学期の中間試験はクラスで最下位かブービー。とにかくやる気が出ずに、家と学校を往復するだけの帰宅部。授業中は窓の外ばかり見ていたことを思い出す。

中間試験後、担任教師の勧めもあり、何か部活動を考えているところにクラスメートから「かるた部」への誘いを受け、入部することになったのである。

競技かるたは、私の知っている百人一首ではなかった。初めて部室に顔を出したとき、先輩は「どれくらい札を知っている？」「あまのはらゝとか あわじしまゝとか 10枚くらいかな」「じゃあこれは？」と目の前に取り札を1枚置いたのだった。「はけしかれとはいのらぬものを」「・・・？」「うかりけるゝも知らんのか。じゃあ札を覚えるところから始めようか」ということで、競技かるたは札100枚を完璧に覚えることで、やっとスタートラインに立つことができる競技であると知らされたわけである。

「札を覚える」といついつ

競技かるたで言う「札を覚える」とは、五七五七七の和歌を和歌として記憶するのではなく、取り札を見た瞬間に上の句の「決まり字」までが頭の中に浮かぶということ

である。取り札に3行で書いてある14文字を読むのではなく、「モナリザ」や「最後の晩餐」などの名画は、名札や解説書を見ないでもそれと認識できるように、札を見た瞬間に上の句がわかる、といった感覚なのである。

「決まり字」とは、当該札（読まれた札）が他の99枚の札と区別できる文字（音）ということになる。例えば、「秋の田の かりほの庵の 苦をあらみ わが衣手は 露にぬれつつ」という天智天皇の和歌の決まり字は「あきの」の「の」である。100枚のうち「あ」から始まる和歌は全部16枚ある。そのうち2音目が「き」の和歌は「秋の田」以外に「秋風に たなびく雲のたえ間より もれいずる月の 影のさやけさ」の2首があり、3音目が「の」なのか「か」なのかで、100枚のうちから1枚の札を確定できるのである。

しばらく練習をすると、取り札（下の句）を見た瞬間に上の句の決まり字までを言えるようになる。取り札100枚を手にとって、1枚ずつ札を読む（上の句の決まり字まで）のだが、大体1秒に2枚、50秒くらいで100枚を読むことができるようになった。ようやく「札を覚えた」と言えるのである。私は覚えが悪く、1か月程かかってしまった。後に名人のタイトルを取った同級生は、3日で覚えたと言っていたのを思い出す。さすが名人といったところである。

「1秒間の静寂」が 大事な試合開始

競技かるたの試合は、1対1で行う。札はそれぞれ25枚ずつ持ち、残り50枚は使わない。その25枚を横87センチ以内、縦は上段、中段、下段の3段に並べ、段と段の間は1センチ、相手の上段と自身の上段の間は3センチ間隔を空けて並べる。並べ終わったら15分間の暗記時間があり、札の位置を覚える。暗記時間が終了したら、大会ならば審判長の開始の合図で、お互いに札を交わし（「お願いします」と言う）、読手にも札をして試合が始まる。

読手は最初に全日本かるた協会認定の序歌「難波津に 咲くやこの花 冬ごもり 今を春べと 咲くやこの花」という百人一首にはない和歌を読む。続いて序歌の下句を読み、最後の音「な」1音を3秒ちょっと引っぱり、約1秒の静寂の間において100枚のうちの1枚の上の句を読む。

かるたの試合で最も大切なのが、この1秒間の静寂とその後が続く札の読まれる音である。選手が最も緊張する場面であり、全身を耳にして読手の口からもれる音に全神経を集中させている。このときには、話し声はもちろんのこと「ガサッ」とか「ゴソッ」といった音も厳禁である。どんなに大きな会場でも、何百人の選手が一堂に試合をしていても、この瞬間だけは全くの静寂が訪れるのである。その後に読まれた札

が1字決まりの札（1音目で確定できる札。例えば、むらさめの、とか、せをはやみ、など）で、並べた50枚の中にあれば、瞬間（0・1秒くらい）に札をはねる音や膝が畳を擦る音、畳を叩く音などで会場全体が騒然とするのである。

お手つきがカギを握る勝敗の行方

競技かるたの試合は、このようにして静寂と騒然を繰り返しながら、自分の持ち札25枚を早く無くした者が勝者となる。最初に横87センチ以内3段に並べたところを「自陣」と言い、相手のところを「敵陣」または「相手陣」と言うが、自陣にある札が読まれ、自分で取れば1枚減り、敵陣にある札を取った場合は、自陣にある札のうちから自分の好きな札1枚を相手に送ること自陣を減らすことになる。

また、試合に使用する取り札は自陣敵陣合わせて50枚だが、読み札は100枚使用するので、札が出る（使用札の中にある）確率は、2分の1である。自陣にも敵陣にもない札（空札）と言うが、読まれたときに、自陣または敵陣の札に触った場合や敵陣にある札が読まれたときに自陣の札に触った場合、またその逆の場合もそれぞれ「お手つき」となり、お手つきをした者に1枚（場合によっては2枚）の札を送ることができる。例えば、最初に読まれた札が空札で、私が敵陣を触った場合はお手つきとなり、相手から1枚の札をもらうことになる。

お互いに25枚対25枚で始めているので、最初は差がないのであるが、お手つきをして1枚の札をもらうことにより、相手は24枚、

私は26枚となり、早くも2枚の差ができることになる。お互い自分の持ち札を無くした方が勝ちなので、今後お手つきをしないという前提で言うと、私は26枚を先に取る必要がある、相手は24枚取ればいいということになり、私はかなり不利な状況に立たされるということになる。お手つきは、野球で言えば押出しの四球を与えるようなもので、お手つきから崩れていく選手は多い。

試合が進んでいくと、送ったり、送られたり、また、決まり字の変化などもあり、どんな札の位置が変わっていくので、途中暗記が欠かせない。繰り返し、繰り返し、札の位置を確認しておくことが勝敗の分かれ道と言っても過言ではない。

特に、出札、空札に関係なく、読まれた札を覚えておくことが非常に大切である。決まり字が変化するのである。例えば「あき」の「の」の札は「あきかせに」があるため、3字決まりの札であるが、「あきかせに」が読まれたその後は「あき」と2字決まりとなり、さらに、1音目が「あ」から始まる



石川県チームの監督として出場した
第23回国民文化祭・いばらき2008
(平成20年11月2日～3日)



札が16枚あるが、他の15枚が読まれてしまえば、次に「あ」と読まれた瞬間に「あきのたの」の札を取ることができるのである。終盤に来て、それをわかっているのといないのでは、勝敗に大きく作用することがわかって頂けると思う。

最初に言っておかなければいけないことが、札を取るとはどういうことかということであるが、一つは、自陣または敵陣にある読まれた札（出札^{でふだ}）と言う）に直接先に触れることであり、もう一つは、札が並べられている最も外側の辺をつないだ架空の

線を「競技線」と言い、そこから押し出した場合に札を取ったことになる。

試合では、普通、審判はつかない。どちらが取ったかを決めるのは、試合をしている当事者同士である。たまには、どちらが取ったかで揉めることもあるが、ほとんどは両者の話し合いで短時間で決着をみることが多い。なお、名人戦やクイーン戦では、審判がつくが、名人や挑戦者が審判に判定を委ねる場面（審判は、尋ねられた場合のみ判定をすることができる）をほとんど見たことがない。どちらが取ったのかは、試合をしている当事者が一番わかっているものである。

私たちは競技かるたをスポーツだと思っている。1対1の対戦型スポーツで審判のいない、または審判が積極的に判定を下さないスポーツは、競技かるただけかもしれない。

さらなる競技かるた普及への期待

『ちはやふる』という末次由紀さん作の少女漫画がある。2009年度に第2回マンガ大賞を受賞した作品で、現在も連載が続いている。2011年10月からテレビアニメにもなつて2012年3月まで放送されていた。2013年1月から『ちはやふる2』のタイトルでまた放送が始まるそう。

けっこう面白くて、私も単行本はすべて持っている。発売日に馴染みの本屋さん

職場まで届けてくれるのである。マンガなので届いたその日の昼休みに読んでしまうのだが、とてもよく競技かるたを理解して描いてある。きつと、編集担当者がしっかりと知っているのだろう。漏れ聞くとおるると、編集担当者は福井の出身者（福井県は「かるた王国」と言われている）で競技かるた経験者なのだそうです。

読み終わった私は、すぐに若い職員に本を渡している。庁内で5、6人が回し読みをしているらしいというか、是非読んでほしいと思って渡している。

この作品をきっかけに全国の「かるた人口」が大きく増加した。石川県かるた協会でも金沢芸術村などを練習会場に「ちはやサークル」を立ち上げたところ、今まで会員不足で悩んでいた金沢で、競技者が増加したのである。最初は小学生がターゲットであったのだけれど、子供につられてその親御さんたちの中にも競技かるたにはまった人たちが出てきた。その中からA級選手が誕生するのもそう遠い未来ではないだろう。

うちの職員もこのマンガに触発されて、やってみようという気を起こしてくれないか、庁内にかかるサークルを立ち上げようとしてくれないかと期待している。競技かるたには個人戦だけでなく、大会数は少ないが団体戦もあるので、野々市市役所チームで全国職域学生かるた大会に出場できたらしいなと思っている。